

○諸富 孝彦, 鷺尾 絢子, 吉居 慎二, 藤元 政考, 北村 知昭

九州歯科大学口腔機能学講座口腔保存治療学分野

Reliability of onymous/anonymous questionnaire survey for dental education by dental student

○Takahiko MOROTOMI, Ayako WASHIO, Shinji YOSHII, Masataka FUJIMOTO, Chiaki KITAMURA

Division of Endodontics and Restorative Dentistry, Department of Oral Functions, Kyusyu Dental University

【目的】

教育効果や履修者の満足度を評価する際、自己記入式アンケートによる調査は広く用いられている。記名式アンケートでは回答者が特定可能で否定的意見を表明しづらいため調査結果に偏りが生じることが懸念されることから、多くの調査では無記名式アンケートが多用されている。一方、記名式アンケートでは試験の評点や出席率等と回答を紐付けすることで詳細な分析が可能となり、真剣味に欠ける回答の減少も期待される利点がある。これまでに我々は、本学歯学科3年生の履修科目「歯の治療学」で実施している体験先導型教育(①予習課題の自己学習レポート提出→②シナリオベース臨床基礎体験実習→③実習内容に即した講義→④技術習熟のため定着実習)に関する履修者への記名式アンケート結果を報告してきた(諸富ら, 日歯教誌 35, 49-57, 2019)。今回、アンケート結果の信頼性を検証するため、記名/無記名が回答に与える影響について分析した。

【対象と方法】

本研究は九州歯科大学研究倫理審査委員会の承認のもと実施した。調査対象の学生を無作為に2群に分け、別室で同時に一方は記名式、他方には無記名式アンケートに回答してもらった。アンケート内容は記名欄の有無以外は同一で、回答法も統一した。質問項目は本教科の特徴である予習、講義前の体験実習、自宅学習時間、シナリオベース実習および本教育法他教科への導入希望についてである。

【結果および考察】

教育内容に対する肯定的・否定的な質問事項のすべてにおいて、記名および無記名群間の回答内容に有意差を認めなかった。回答未記入や指示に従わない不適切な回答は、無記名群が有為に多かった。以上の結果は、教育評価アンケート結果は記名の有無による差異は生じず、一方で不備な回答が減少するため、より正確な評価を可能とすることを示唆する。

【結論】

歯科医学教育内容に関する調査において記名式アンケートは有用な調査方法である。